感染症診療の最前線2015（Ⅵ）

麻疹

国立感染症研究所 感染症疫学センター 第三室（予防接種室）室長
多　屋　馨　子
（聞き手　齊藤郁夫）

齊藤　日本では麻疹対策の長い歴史があるのですね。

多屋　日本では麻疹は「はしか」とも呼ばれて、命がけの病気といわれてきました。昭和53年から麻疹は子どもたちの定期の予防接種対象疾病に導入され、平成18年６月からは２回の予防接種を受けさせることに決めて麻疹対策を行ってきました。

齊藤　流行が定期的にあるのですね。

多屋　そうですね。だいたい数年に１回、大規模な流行を繰り返してきたのですが、平成19年の流行が比較的大きく、特に10代、20代を中心に流行しましたので、多数の大学が休校になりました。

齊藤　そこで、もう一段ギアチェンジしたのですか。

多屋　そうです。平成19年の流行を受けまして、国は麻疹に関する特定感染症予防指針を告示し、それまでは小児科の一部の医療機関、あるいは比較的大きな基幹病院からのみ麻疹の患者数を届けていただいていましたが、麻疹と診断した場合は、すべての医療機関に、保健所に届けていただくことが法律に基づく義務となりました。

齊藤　「私のところでも、今日１人患者さんがいました」と届け出るというようなことですか。

多屋　そうです。もう一つは、10代と20代でかなり大規模に流行しましたので、まず10代の人々、学校に通っている子どもたちの免疫を強化しようということで、中学１年生と高校３年生相当の年齢の方を対象に２回目のワクチンを定期接種、ということは全額公費負担なのですけれども、しようということに決まりまして、それが５年間行われました。そうすると、平成２年４月２日よりあとに生まれたお子さんは全員がどこかで２回の接種を受けるチャンスを持ったということになります。

齊藤　それを平成20年から。

多屋　５年間行いました。

齊藤　実際、皆さん、かなり受けましたか。

多屋　１歳のお子さんは非常に接種率が高くて、４年連続95％以上の接種率を保っています。小学校入学前１年間のお子さんがだいたい92～93％ぐらい、中１が88％ぐらい、高３相当が全国平均だと８割なのですけれども、中には75％を切るというような自治体もありました。

齊藤　いま一つということですね。

多屋　そうですね。

齊藤　平成19年に日本では大きな流行があって、その後はどうなりましたか。

多屋　平成20年から全数届け制になりましたが、平成20年は１万1,000人を超える大規模な流行となりました。予防接種を受けていない人、１回だけ受けた人、受けたかどうかわからない人が多くかかったわけですけれども、特定感染症予防指針に告示されたように、１人患者さんが出たらすぐ対応しましょうとか、ワクチンをしっかり受けましょうといった対策が功を奏しまして、平成21年、平成22年、どんどん患者さんの数は減り、患者数としては平成20年と比較して97～98％減というところまでいきました。

ただし、海外ではまだ麻疹が流行している国々がたくさんあります。特に平成23年のヨーロッパでの大きな流行、平成26年の東南アジアでの大きな流行があったときに、日本からその国に行かれた方が渡航先で麻疹ウイルスに感染し、10日ぐらいの潜伏期がありますので、帰ってきてから発症するということがありました。周りには免疫がない人が少し残っていますので、そういう方に感染を広げてしまって、医療機関での感染伝播や、医療従事者の罹患などが発生したのが平成26年の初めのころです。

齊藤　かなり減ったけれども、まだ。

多屋　免疫を持っていない人が少し残っているというところですね。あと、０歳のお子さんも、まだワクチンを受ける年齢になっていませんので、そういう赤ちゃんがかかってしまったということがありました。

齊藤　最近の例ですと、どういう国で多かったのですか。

多屋　平成23年はヨーロッパの国々で流行しましたが、最も多かったのはフランスだったと思います。平成26年につきましては、多い国としては、フィリピンに渡航歴があった方が比較的目立ちました。あとは、ベトナムとか、インドネシアとか、中国とか、平成27年はモンゴルとかマレーシアなども報告されています。

齊藤　麻疹の遺伝子の型はどうですか。

多屋　麻疹ウイルスは24種類の遺伝子型に分類されています。以前、平成23年にヨーロッパで流行したときは、主にＤ４という遺伝子型の麻疹ウイルスだったのですけれども、平成26年に

フィリピンで流行した遺伝子型はB３という麻疹ウイルスが多かったです。アジア地域ではD８とかD９とか、中国ではH１という遺伝子型の麻疹ウイルスが主に検出されているのですけれども、今の日本はいろいろな遺伝子型の麻疹ウイルスが海外から持ち込まれていますので、B３もあれば、D８もD９もH１もと、いろいろな種類の遺伝子型の麻疹ウイルスが検出されています。

齊藤　日本と近い国でまだ流行があるということですか。

多屋　日本は特に麻疹の流行規模が大きい国々に囲まれている国だと思います。アジアの国々はまだまだ麻疹の流行がけっこう大きいものですから、そういう国に旅行で行ったり、お仕事などで渡航される前には、ぜひご自身のワクチン歴を確認していただいて、受けたかどうかわからない、記録が残っていない場合は、受けてから行かれることをお勧めします。

齊藤　海外に行って感染して日本に戻ってきて、日本で広がらせるということですね。風疹などもそういうことがあるのですね。

多屋　風疹もまだまだ海外ではワクチン自体が公的接種になっていない国もたくさんありますし、大規模に流行している国もあります。麻疹だけではなくて、麻疹と風疹を両方一緒に対策を取っていこうという観点から、原則、麻疹風疹混合ワクチンで受けてください、というのが今の定期接種でお勧めしているポイントかと思います。受けるのであれば、麻疹風疹混合ワクチンを受けてから渡航していただけると、両方の病気の予防につながると思っています。

齊藤　今、日本の会社も国内から東南アジアにどんどん工場を移して、その工場に工員さん、社員さんがどんどん出ていっていますね。そういう人たちも重要な対象ということですね。

多屋　そうですね。特に風疹につきましては、予防接種の制度が男性と女性とで大きく異なっています。昭和54年４月１日よりも前に生まれた男性は風疹のワクチンを１回も受けていないのです。ですので、30代後半から50代前半の男性は２～３割ぐらいが風疹の免疫を持っていないという状況ですから、特にそういう方は「はしか」と風疹の両方予防できる混合ワクチンを検討していただきたいと思っています。

齊藤　その辺がまだ抜けているように思われますね。

多屋　ぜひトラベラーズワクチンの一つとして、「はしか」と風疹のワクチンを考えていただけるようになればと願っているところです。

齊藤　日本は、WHOから認定を受けたのですか。

多屋　そうです。今まで何年もかかって麻疹対策を進めてきたのですけれ

ども、平成27年３月に日本はWHOの西太平洋地域事務局から麻疹の排除状態であるという認定を受けました。

齊藤　つまり、日本でオリジナルな麻疹は起こっていないということでしょうか。

多屋　そうですね。土着していた麻疹ウイルスはなくなりました。１年以上、同じ遺伝子型のウイルスの流行、伝播が続きますと、排除は認めてもらえなくなってしまうのですけれども、日本は入ってきても、その時々で終わっているということが証明できるようになりましたので、このようなことも報告して、麻疹排除状態であると認定を受けました。

ただ、認定を受けたからといって安心しないでいただきたいと思っています。海外にはまだまだ流行している国が多いので、認定は受けたのですが、渡航される前にはぜひワクチンを受けてもらいたいし、１人発症すると周りにいる免疫がない方にうつしてしまいますので、安心してはいけないと思うのですが、平成27年はそういう意味で、今までみんなが苦労して頑張ってきた成果の年だったかなと。１人だけが頑張っても達成し得なかったことなので、病院だけではなく、保健所もそうですし、多くの方が麻疹対策を頑張ってきた成果ではないかと思っています。

齊藤　成功例としてよかったということですね。

多屋　本当によかったと思います。

齊藤　ただ、まだ油断はできないということで、実地医家の先生方もその辺は十分注意していただきたいと。

多屋　予防接種を２回受けたかどうかを確認してあげていただきたいなと思っています。

齊藤　どうもありがとうございました。